

ALL ENGLISH SPEECH

満員の東北大学萩ホールで堂々発表

第3回国連防災世界会議パブリックフォーラムのメインフォーラムが16日、東北大学萩ホールで行われ、(主催)文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、宮城教育大学、「持続可能な開発のための教育」を通じた防災・減災の展開より良い子どもたちの未来に向けて」をテーマに、山脇良雄(文部科学省国際総括官)の挨拶のあと、東日本震災被災地における実践事例発表が行われた。東北大学、宮城教育大学、気仙沼市立階上中学校からの発表後、「災害科学科開設に向けた歩み」ユネスコスクール加盟を目指して」と題し本校が発表した。はじめに、小泉博校長が本校の防災教育とESD(持続可能な開発のための教育)現代社会の諸課題を自らの問題として捉え、身近なところから学習や活動を行う)の係について概略を説明し、小畑綾香さん(3年)と藤門莉生君(1年)がESDの視点で捉えた本校の防災教育の取り組みを英語で発表した。当



発表する小畑さん(左)、藤門君(中央)、小泉校長(右)

Beyond Tomorrow 国際交流事業

フィリピン人学生来校

東日本大震災により被災した若者のリーダーシップ教育支援事業であるBeyond Tomorrow(以下ビヨンド)のプログラムに参加している若者が14日、巨大台風ヨランダの被災地で復興支援活動を行った際に出会ったフィリピン人学生とにも来校した。一行は国連防災世界会議のフォーラムを企画し、被災地の高校生と災害について話し合う機会を持つことを目的として来校、本校からは12名の生徒が参加した。それぞれの自己紹介後、フィリピン人学生からはスライドを使ってフィリピンの文化や台風の被害について説明がなされ、多賀城高からは本校の防災教育活動の取り組みを紹介した。その後、3つのグループに分かれ防災に関する問題点や、災害時のコミュニケーション(地域や学校)が果たす役割、災害の伝承について話しあった。それぞれが自らの被災体験をもとに、積極的な意見交換を行いその結果を共有した。

では、本校生が設置した津波標識をたどり、津波の高さを実感した。また、貞観津波でも被災を逃れたとき「末の松山」にも立ち寄り、英語で説明を加えて案内した。短い時間ではあったが、お互いの親交が深まったことを確かめながら別れを惜しんだ。ビヨンドでは今回、本校を訪問した模様を15日のパブリックフォーラムで発表した。



フィリピンの紹介をするチャールズ・マルナランさん

14日に本校を訪問したビヨンドトウモローは15日、TKPガーデンシティ勾当台でフォーラムを開催、ビヨンド奨学生の学生が、「震災で家族を失った、災害で1人の命も奪われてはいけません。」と訴えた。フィリピン人の学生からは三陸や本校を訪れたときの報告・提言がなされた。その中でジュッサ・ラビラップさんは、「災害による被害を減らすためには、教育が大切だ。多賀城高校の標識設置活動はとてもいい例だ。」と述べた。その後のパネルディスカッションでは学生が主体となり地域とコミュニティを形成する案も出され、本校から参加した生徒も積極的に発言していた。フォーラムでは外務省国際協力局審議官の豊田欣吾氏が講評を述べ、安倍昭恵首相夫人が学生たちにメッセージを送った。



フォーラム後、安倍昭恵首相夫人と記念撮影。左から鈴木奈々子さん、安倍夫人、郷右近香那さん、小畑綾香さん

「東北、そしてアジアの若者の力・被災した若者達の声」

鈴木奈々子さんの感想
外国の人たちは日本人より防災や災害に対して関心が低いことがわかった。このフォーラムを通して、私自身あまり考えたことがなかった災害の伝え方について考えることができた。

「生きる力」SENDAI CAMP報告

18日、東北大学災害科学国際研究所が主催する「生きる力」市民運動化プロジェクト推進のためのシンポジウムが、東北大学川内キャンパスで開催された。本校からは昨年9月に行われた被災訓練プログラム「SENDAI CAMP」の発表を行った。英語を交えながら1年の伊藤いずみさんと伊藤綺花さんが、自分たちの参加した模様を説明した。繁華街で大地震が発生した時のリスクを実際にまち歩きをしながらシミュレーションしたこと、避難所を想定し食事の配布作業をしたことなど、説明と感想を述べた。続いて、1年の北野健人

君、亀山沙月さんが本校の防災教育について説明した。2年の千坂星菜さん、倉本大生君、岩淵友亮君はSPP事業で取り組んだ調査から発展させた「北上川などに堆積する砂から地殻形成を調べプレート動きを探る研究」を発表した。

伊藤綺花さんの感想
防災会議を通して、防災は常に身近な存在として捉える必要があると感じた。会議で提案されたことを少しずつ実践したい。

被災訓練プログラムの報告をする伊藤いずみさん(左)と伊藤綺花さん(右)

多賀城市との連携事業スタート

多賀城市では19日、国連防災世界会議の関連事業として、市民を対象に減災について考える減災市民会議を開催した。

午前中は、本校で設置した津波波高標識をたどる「伝承と減災を考えるまち歩き」が行われた。この催しは、被災直後の現地の写真を見ながら、新しくできた災害公営住宅まで約1キロの道を歩くというもの

で、多賀城市と本校が連携して行う初の事業となった。3年の福田菜さん、2年の後藤環君、沼田風樹君、1年の岩佐彩音さん、木村優花さんの5名は、ガイドとして実際に標識を設置したときの様子を話しながら歩いた。また、1年の北野健人君、藤門莉生君、亀山沙月さん、加藤彩理亜さんは参加者の通過に合わせて、標識の



設置の様子を披露した。このフィールドワークには約60名が参加。多賀城市民以外にも東京や埼玉、外国からも参加者があった。出発点である市役所で標識を設置するようになった経緯を説明した3年の福田さんは、「私も津波に襲われた時に祖母を失った。この経験をたくさんの人に知ってもらいたい。」と話した。

午後からはワークショップ形式の座談会「たが女子会」減災の鍵は女子力」が開催された。本校からは2年の藤原安弥香さん、佐藤光さん、中村梨子さん、高橋瑞穂さん、1年の岩佐彩音さん、木村優花さんが参加。あの日、あのとき、私たちが気付いたことなど震災をテーマに話し合った。県外からも含め約30名の参加者は、高校生や大学生、主婦と年齢層も幅広く、世代ごとに様々な角度で震



ワークショップに参加する中村さん、藤原さん、高橋さん